双剣使いの一護

ポケモン大好きクラブ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の人より霊感の強かった一護はある日、死神のルキアと出会い死神の力を手に入れる。そして、現れたのはなんと双振りの刀だった。

目次

一護と非凡的日常 1
一護と双剣 3
一護と死神 7
一護と滅却師 12
人物設定 15
一護と初仕事 18
一護と石田家訪問 22
一護と封印 26
一護と井上織姫 31

一護と非凡的日常

とある電柱のそばでケンカをしている青年がいた。
学校の帰りだろう青年は制服を着ていた。対する相手は私服で、片手にはスケボーを持った４人組である。なぜこの２組がケンカをしているかというと…
「ヒィ！なんだよ、お前！」
「問題です！ここにおいてある花は何でしょう！」
いきなりの質問に４人組の１人が答える。
「ええと、この間交通事故で死んだ女の子への…お供え…もの…」
「正～解～」どかっ
言葉と同時に鋭い蹴りが顔面に入る。１人が彼の名前を呼ぶ。
「では何でその花は倒れているんでしょうか？」
と言って指差した先には倒れた花瓶があった。花はまだ新しくつい最近持ってきたものだとわかる。
「それは、俺たちがスケボーをやってて倒しちまったから…」
「またまた正解‼」どかっ
わかりきった答えを言わせていくと同時に言った相手のお腹に蹴りが入る。恐怖からか他の２人からは「ヒィ！」というか細い声が聞こえる。
そして最後は質問ではなく
「じゃあこの子に謝らないとなぁ」
と言って出てきたのは頭から血を流した年場も行かない女の子だった。さらによく見ると女の子の体は透けていた。
４人組は「ギアアアアァァ!!」と叫びながら逃げていった。
それを見て青年と女の子は笑い合う。
「お兄ちゃん、ありがとう。あの人たちうるさかったから。」
「あぁ、気にすんな。花、明日新しいの持ってきてやるから、早めに成仏しろよ。」
と女の子に別れを告げて青年は帰路につく。明らかに体の薄い、そう幽霊である少女に出会っても青年にとってはこれは何でもない日

常に過ぎなかった。
　青年の名前は黒崎一護。空座町に住む高校一年生で、髪の色は鮮やかなオレンジ色なため不良によく絡まれるが地毛である。彼は人より霊感の強い人間であるためよく幽霊にも絡まれたり、憑かれたりする。ただし、除霊することはできない。
（いや、あの力は除霊じゃなくて消滅だからな…。）
　など考えていたらいつの間にか家に着いていた。
（まぁ、考えても仕方ないか。）
「ただいまー。」ガチャ
　玄関のドアを開けるとなにかが一護に向かって飛来してきた。
「おそーい!!!」
「ぐはっ！」
　不意討ちだったため顔面に回し蹴りをくらってしまう。
「何すんだよ親父！」
「うるさい！うちの門限は7時と決まっている！」
「今時高校生を7時に帰らせる親がどこにいやがる！」
　全くである。そしてこの言い合いは殴り合いになり、一護の勝利となる。そして、双子の妹の遊子と夏梨と食事を食べる。これが黒崎家の日常であった。

一護と双剣

部屋に戻った一護は一息着いていた。
「ったく、親父のやつ…ん？」
部屋の中に不自然な黒揚羽蝶が飛んでいた。そして気がつくとその後を追うように、黒い着物を着た少女がいつの間にかそこにいた。そう入って来たことに気付けなったのだ。
「あ、あんた。」
「近い…」
少女は部屋を出て一階へ行く。
一護は何者か聞こうと声をかけようとするが、まるでこちらは関係ないとばかりに無視をする少女。
（もしかして見えてない？いやいや馬鹿な。もしかして自分は見えてないと思ってる？）
そっちの方が可能性は高いと納得する一護。再び声をかけようとすると、重くのし掛かるようなドロドロとした感覚が襲いかかる。
「くっ、がっ、なっなんだ…これは…気持ちわりぃ。」
思わず膝を着いたがしばらくすると慣れてくる。
「おいっ、貴様。大丈夫かっ!?」
「あぁ。」
「!?」
少女も返答があると思わなかったのかびっくりしている。
「それで、アンタはこの変な感覚の元を知っているのか？」
「変な感覚？」
「何も感じないのか？」
「あ、あぁ。」
戸惑いながら少女は答える。その直後耳につんざくような大声が部屋に響いた。
「なっ！」
（これは虚の声だと！こんなに近づくまで気がつかないなどあり得ん！なぜ…）

一護も部屋を出て一階へ行くと、親父と柚子は倒れ、花梨は巨大な仮面を着けた化け物に捕まっていた。
「一兄逃げて…」
「親父！遊子！夏梨！待ってろ今助ける！」
最後の力を振り絞って夏梨は、一護に逃げろと言うが一護は夏梨の願いを聞き入れることも、この状況で冷静でいられるほど人間が出来ているわけでもなかった。
一護は近くにあった椅子を持って化け物に突っ込んでいく。
「うおおおおおおおお。」
が、当然の如く力の差は歴然で片手で殴り飛ばされてしまう。その時化け物は「見つけた」と小さく呟き獲物を狙う目をしていた。そして一護へ手を向けるが、ザシュッという音がして化け物の手から夏梨が落ち、すかさず一護が下へ入りキャッチする。
「馬鹿者！人間の力で敵うはずがなかろう！奴は虚と言って魂食らう存在だ。幸い貴様の妹たちは魂は食われてはおらん。」
「ほんとか！」
「あぁ。」
ひとまずは安心した一護だが、敵はまだ倒れていないことを思い出し気を引きしめる。
「おそらくだが、奴はより霊的濃度の高い魂を求めている。さっきまではまるで栓がされているかのように何も感じなかったが、今この場で誰よりも霊圧が高いのはお前だ。」
「お…れ…？」
栓がされているという言葉に少しだけ反応するが、昔から霊感のあった一護はこの言葉の意味がよく理解できなかった。
「つまり奴はお前を狙って、ここを襲ったのだ。」
「なっ！」
少女は大きな力を持つものは自覚させておいた方が良いと、わざと言葉にする。ただしここではそれが悪手となる。
「俺のせいで襲われたってことか…。」
「何を…？」

一護の纏う雰囲気に不穏なものが混じる。
「うおおおおおおおお。」と虚の前に一護は走って出ていった。
「よぉ、お前。俺の魂が欲しいんだよな。なら俺とサシで勝負しやがれ！」
一護は虚に無謀な1対1の勝負を持ちかけて、お互いに雄叫びをあげながら向かっていく。興奮のためか、一護の右腕からは漏れ出した蒼い霊圧が雷のように少しだけ出ていたが、一護は無意識のためか気がついていなかった。お互いの距離がゼロになろうとしたとき、間に黒い物体が否、少女が入って来た。そして一護の視界には赤色が舞っていた。
「な…なんで…。」
少女は虚の歯に噛まれていた。
「この…たわけが…。貴様の力では勝てないことなど宣告承知のはず。貴様の魂をくれたら終わりな訳がなかろう。」
「ぐっ！」
確かにと一護は思ってしまった。
「はぁ…。家族を助けたいか？」
一拍おいた後に少女は聞く。それに一護は
「当たり前だ！あるのか、方法が!?」
即答し食い付く。
「あぁ、私は死神だ。その死神の力をお前に譲渡する。」
「譲渡？それって大丈夫なのか？」
「譲渡すると言っても半分だけだから大丈夫だ。」
「わかった。」
本来なら禁止されているが、命の危険でもあるので詳しく伝えずにに行う。
「刀を体の中心に突き刺せ。そうすれば、私が力を注ぎ込む。」
一護の顔が緊張し、息を飲む音がする。だが一瞬後に不適な顔になり
「刀をよこせ死神」
「死神ではない、朽木ルキアだ。」

「おれは、黒崎一護だ。」
　刀を刺しながら名前を言うと、眩い光が溢れ、光が収まった場所には背中に長刀と腰に太めの短刀を携えた黒い着物の一護だった。
「刀が…2本…だと…!?」
（しかもなんなのだ、あの背中の刀の大きさは!?）
　ルキアは1人混乱していた。それもそのはず。本来なら死神になったばかりのものは皆浅打と呼ばれる小さい刀を1つ持つのが普通なのだ。
（刀が大きいということは霊圧が大きいということ。それに半分だけの譲渡のつもりが全部持っていかれた。奴は何者だ？）
　そうこう考えているうちに一護は一撃で虚を倒していた。消えていく虚を後ろに
「サンキュな、ルキア。力、貸してくれて。」
「いや、私こそ力が足りずすまなかった。」
（力がなくなったことを悔いていても仕方がない。気は進まんがあの男のところにでも行くか。）
「今日はもう遅い。死神の力についてや、少したのみごともあるのでまた後日訪ねる。」
「あぁ、わかった。じゃあな。」
　こうして俺たちは別れる。別れ際に親父と遊子と夏梨に何かしていて、聞いても「辻つま合わせだ、詳しくはまた今度な。」と言われてしまった。

一護と死神

「グッモ～ニン！い～ちご～!!」どかっ
　一護の部屋から鈍い音が響く。
「う…腕をあげたな…一護…。」がくっ
「まあな、それより遊子と夏梨の怪我は大丈夫なのか？」
　あれだけの大怪我だ。まだ痛むに違いない。それにしては親父が少しも慌てていないのが気になるが。
「怪我？何のことだ？昨日のトラック事故なら誰も怪我なんてしてないぞ？」
「はっ？」
（トラック事故!?）
　一護は急いで一階へ降りてみるが、昨日と変わらず大きな穴が開いているだけだった。しかし、それに対しての家族の記憶のみが変わっていた。
「奇跡だ、これだけトラックが突っ込んできているのに全員無傷とは。」
「それより全員起きなかった方が奇跡だよ。」
（ルキアが別れ際にやっていたのはこれか…）
　と一護は心の中で納得する。妹たちの傷もないし、こちらの方が確かに都合が良いだろう。またと言っていたので、また会いに来るだろうと疑問は押し込める。
「そろそろ朝ごはんにしよう。遅刻するよ。」
　遊子の声で我にかえる。
　遅刻するとは言われたものの、家を穴の空いたままにはできないため、とりあえずお昼まで軽く片付けてから登校する。
　教室に入って席に着くと、友達の浅野啓吾と小島水色に茶渡泰虎ことチャドが一護の周りに集まった。
「一護～、お前んちトラック突っ込んだんだってな。」
「片付け終わったの？」
「そんなに早く終わるかよ。」

軽口を叩き合う。穴が開いていたのだから半日やそこらで終わるはずがない。
「ム、手伝うか？」
チャドは好意からその言葉を言うが、一護はひきつり気味の笑顔で
「いや、いいよ」と断りを入れる。
「チャド、お前じゃかえって破壊しちゃうんじゃないの？」
と半分冗談半分本気のようなやり取りをしているとき、後ろから1人の生徒が歩みよってきた。
「あら、あなたが黒崎くん？」
「はっ？」
いきなり声をかけられ、後ろを振り向くとそこには見知った…というわけではないが、昨日見たばかりの姿がそこにいた。
「隣の席になりました。朽木と申します。」
「へっ？あっあぁ、黒崎だ。よろしく。」
差し出された手には『放課後に屋上』と書かれていた。

「じゃあな～、一護。片付け頑張れよ～。」
「じゃあね～。」
「ム。」
「おう。また明日な、啓吾、水色チャドも。」
それぞれが鞄を持って教室をあとにする中、一護は屋上へと向かった。
屋上へ行くとすでにルキアが仁王立ちで立っていた。
「わりぃ。待たせたか？」
「いや、大丈夫だ。」

「そうか、で話しってのはなんだ？」
「あぁ、それなんだが…。」
　ルキアは気まずそうにいいよどむ。そして意を決したのか、一護をまっすぐに見ながら口を開く。
「まず、私の霊力はすべてお前へ譲渡したので今の私に霊力はない。つまり死神の力が全くないのだ。」
「はぁ！お前あの時半分って言ったじゃねーか！」
「私もそのつもりだった！だが…なぜかすべてお前の中へ入っていったんだ。」
　ルキアは歯を噛み締めながら、今にも下唇を噛みそうな位悔しそうな顔をしていた。
「死神の力のない魂魄など、無力だからな。今はある男に依頼して作ってもらった特殊な義骸に入って、霊力の回復をはかっている。」
「そうか…。」
　応急処置のようなものだと言われるが、一応は胸をなでおろす一護だった。ホッとしたのもつかの間で、本題に入るようだ。
「私に死神の力はもうない。そこでだ、貴様には私の仕事を代わりに行ってほしいのだ。」
「それはお前の死神の力を俺が貰っちまったからか？」
「それもある。もう1つは貴様の力を尸魂界に見つからないようにするたみめに、私が問題なく仕事を行っているよう見せなくてはならないのだ。」
「尸魂界（ソウル・ソサエティ）？」
　初めて聞く言葉に一護は疑問を浮かべる。
「言っていなかったな。基本的に死んだものが住まう世界で、その中のほんの人の握りのものが死神になれるのだ。私たち死神の役目は、虚を討伐すると同時に成仏していない魂を尸魂界に送るというバランサーも担っている。」
「バランサー？」
「ただの魂がそこら辺にさ迷っていると、虚に目をつけられて食われたり、悪霊になって虚になったりするんのだ。その前に尸魂界に保護

するのだ。」
　わかったようなわからないような。と一護が考えていると、
「意味はわからなくとも良い。することだけ理解していろ。」
「ん、おぉ。」
　まぁ、俺は本当の死神じゃあないし、そこまで細かく考えなくてもいいだろ。
「それよりお前住むとこは？」
「ビクッ!!あああるにきまつまっておろう!!」
「ないのか？」
「あるわっ!!」
「ふーん、わかった。また聞きたいことあったら聞くわ。じゃあな～。」
「えっ、あっ、あぁ。」
　こうして一護とルキアは別れた。

　おまけ
「ただいま～。」
「おかえり、お兄ちゃん。」
　親父は診察中のようだ。とても静かだ。心穏やかに部屋へ俺は上がって行く。
「帰ったか、一護。」
　ドアを開けると、仁王立ちで挨拶を返してくる見た目少女の年増が

いた。さっきまでは穏やかだった心が荒んでいくのを感じる一護であった。

一護と滅却師

一護とルキアは登校していた。
「ったく、うちに来るんなら前もって言えよな。つーかなんで押し入れなんだよ。」
「さすがに普通に泊まらせていただく訳にはいかん。」
どんな遠慮だよと突っ込みたいところである。
そんなやり取りをしているうちに学校へとついた。
「ではな。」
「あぁ。」
2人は教室でそれぞれ別れて席に着く。
そして自分の席で話をしていた一護のもとに誰かが走り寄ってきた。
「黒崎！どういうことだ！」
「はっ!?」
いきなり、バンッ！と机を叩いて一護に訴えたのは成績が優秀なことで有名な石田雨竜だった。なんとなく予想はしていたのか、こんなところでは話すことも話せないため、一護は連れ出すことにした。
「はぁ。とりあえず屋上でも行くぞ。」
「わかった。」

「んで、何が文句あるんだ。」

「何で死神になったんだ。君ならある程度の虚なら追い払えるだろう。」
「いや、無理だ。」
「なっ！どうしてだ！」
「俺は昔霊圧を暴走させた。その時に軽く封印をかけられてるんだ。」
「封印…。」
「あぁ、お前にあったのはその封印をかけられた後だったな。」
　僕とあう直前ということはもうずいぶんと昔にかけられているということだ。
「この封印かけたの竜玄さんだからな。」
「なにっ！」
「お袋が目の前で死んじまったショックで力が漏れ出ちまってよ。俺の周辺一帯が半分荒れ地になっちまってたぜ。」
（確かに僕は黒崎が父と会って何をしているのか何て、聞こうとも考えようとも思わなかった。）
　石田は唖然とする。当時は小学生のはずだ。それなのに力が漏れ出ただけで荒れ地になってしまうなど、コントロールできなければ害にしかならないと言っていいだろう。おそらく幼かったが故に、滅却師の力を持っていることのみを教えられ、力が暴走したことは伏せられたのだろう。
「だが黒崎、お前は滅却師でもあるのだろう。それなのに死神としてやっていくのか？」
「どちらか決めなきゃダメな訳がないだろ。それに、片方を選ぶってことは片方を助けちゃダメって言ってるように聞こえるぞ。」
　幼い頃、石田は師匠である祖父を死神に見殺しにされている。それ以来、死神にあまり良い感情を持ってはいない。
「ぐっ、別に、そういうわけでは…。」
「ならいいだろ。手ぇ出したくないなら、黙って見とけ。」
「はぁ。わかったよ。」
　一護はこうなるとてこでも動かない。
「それと封印のことで竜玄さんと話したいことがあるんだけど、伝え

といてくれねえか？」
「あぁ、構わないよ。時間がとれそうな日がわかったら連絡するよ。」
「おう。」
じゃあな。と言って手を振りながら一護は屋上を後にする。

人物設定

黒崎一護

朽木ルキアから死神の力をもらい、死神代行としてルキアの代わりに仕事を行うことになった。斬魄刀は長刀と短刀の2本あり、背中に長刀を、腰に短刀をそれぞれ携えている。

長刀には虚の力、短刀には滅却師の力がそれぞれ宿っている。

滅却師の力は幼い頃、母親が目の前で死んでしまった時に暴走してしまい、その場に駆けつけた竜玄の手によって封印された。この時自分の持つ力のことと、母親の持つ力について教えられる。

朽木ルキア

一護に死神の力を譲渡した死神。今は力がすべてなくなってしまっているので、浦原喜助の協力を得て特殊な義骸に入って過ごしている。

冷静な性格で、頭ごなしに話を否定することが少ない。

石田雨竜

滅却師として修行しながら育ってきた。幼い頃、父親である竜玄に一護と引き合わせられて出会う。一護が近くにいたことにより、死神嫌いが少し軟化した。

一護と出会ったのは、一護が力を封印した後だったため石田は封印のことは知らない。

石田竜玄

滅却師の力は使える。一護の母親の従兄弟。一護の母親である真咲のことを気にしていた。

暴走していた一護の力は滅却師の力だったため、竜玄の力で封印することができた。力の封印のことと暴走したことは一心にも知らせている。

黒崎真咲
石田竜玄の従姉妹。一護の母親。元滅却師で、静血装（ブルート・ヴェーネ）が得意。もともと竜玄の家に許嫁として居候していたが、虚の力が混じったことで勘当されてしまう。
虚に襲われた日、急に力が使うことができなくなり虚を倒すことができずに死んでしまった。

黒崎一心
一護の父親。元死神で、元十番隊隊長であり志波家当主（分家）。竜玄ともそれなりの付き合いをしており、一護と石田家が仲が良いのも知っている。
一護の前ではふざけた態度しかとらないため、元死神であることは一護は知らない。時が来たら話そうと思っているが踏ん切りがつかないが、死神代行になったことでその時は近いかも…。

浦原喜助
元死神。一心と竜玄とは知り合い。ルキアは何か必要な物があるときは浦原商店で買っている。

黒崎遊子
一護の妹で双子の姉。兄妹で唯一母親似。母親が亡くなってからは、家事全般を担当。おしとやかな性格だが、意外と強かな部分もあわせ持っている。

黒崎花梨
一護の妹で双子の妹。ボーイッシュでアウトドア派。霊感は一護にも負けないほどだが、一護がいるため一護の方へと集まって来ているようである。

井上織姫
一護のクラスメイト。お兄ちゃんを看取った病院のとこの人とい

う認識で、一護のことを気にする。

茶渡泰虎

一護の親友。メキシコ人とのクォーター。寡黙だが心優しい。昔祖父に諭され喧嘩をしなくなり、一護と出会いお互いのために拳を振るおうと誓いあった。

一護と初仕事

教室に戻るとルキアが待っていたと言わんばかりの顔で待ち構えていた。
「一護、来い！」
「えっ、あっ、おいっ！」
いきなり手を渡り廊下まで引っ張って来られた。
「虚が出たぞ。」
と手に手袋をはめながらルキアは言う。そして俺が何か言おうと口を開きかけたその時、ルキアの手袋をはめた手が目の前に迫っていた。
急なことだったため避けることもかなわず、そのまま後ろへと突き抜ける。
（突き抜ける？）
触れられた感覚がおかしいことに気がつき、そして開けた目の前には自分の体があった。
「へっ？俺の体？」
「そうだ、今の貴様は霊体だ。」
一護の今の体は以前に死神になった時と変わらない、死に装束に2本の刀を携えていた。そして2人は虚が出たと言う指令が出た公園についた。
「ここか？ルキア。」
「ああ、間違いない。」
確かめあっていると、大きなものが崩れる音がした。音がした方を見ると、霊の少年が虚に襲われていた。
一護は少年を助けるため飛び出し、背中の大剣を掴んで勢いよく顔の仮面に向かって降り下ろした。
「うおおおおぉぉぉぉ!!」
不意を突かれたからか、一護が速かったからかこの一撃は虚に当たり消滅した。
そして霊の少年に近づくとさっきまで襲われていたからか、一護が

刀を持っていて怖かったのか怯えていた。
「大丈夫か？おいガキ、またこんな怖い思いしたくなかったらさっさと成仏しろよな。」
「一護、斬魄刀の柄の先の部分を少年の額に当てろ。そうすれば尸魂界に送ることができる。つまり成仏と同じだ。」
「ああ、わかった。」
一護は柄の先を軽く少年の額に当てた。すると少年の体が青白くひかり、少年は怯えていた顔が嘘のように安らかな顔をしながら消えていった。消えた後には黒揚羽が一匹飛んでいた。
「これで魂送は完了だ。」
一護の初仕事はこれで終わった。
「じゃあ帰るか。」
「ああ」
一護とルキアは帰路についた。
「帰る前にお前の夕飯買って帰るか。」
「何！何故だ！」
「何故って…お前は押し入れに住んでんだから一緒に飯が食えねぇだろ？」
「!!」
と言うやり取りがあった。

夕飯とお風呂を済ませ、部屋でのんびりと過ごしていると携帯に電話がかかってきた。画面を見ると石田の名前が表示されている。

「ん？もしもし、どうした？石田。」
「ああ、今日言っていた父の予定を伝えようと思ってね。」
「え、もうわかったのか。すげえな。」
　石田の父、竜玄は空座総合病院を営んでいるのでとても多忙だ。そのため一護は予定がわかるのはもう少し後になると思っていた。
「んで、いつなんだ？」
「明日だ。」
「は？」
　聞き間違いだろうか、と一護は思い少し間抜けな声をに出してしまうが石田は予想していたのか冷静に返してくる。
「いや、俺もこんなに早く予定が空いてあるとは思っていなかったんだが、たまたま明日は予定が空いていると言っていてな。それに明日は学校は休みだしね。」
「まあ、確かに…。早いにこしたことはないから別にいいけどな。じゃあまた明日な。」
「ああ、おやすみ。」
　切れた電話を見ていると
「一護、今の電話は何だ？」
　とルキアに聞かれる。
「ああ、友達の石田だよ。明日あいつの家に行くけどお前も来るか？」
「良いのか？」
「別にいいぜ。それに明日は俺があいつの親父さんに用事かあるんだしな。」
「親父殿に？」
　明日になればわかるさ、と一護は布団に入って寝る体制になった。ルキアもこれ以上は無駄と、押し入れの中へと入って行った。

　おまけ
「って、ちょっと待てー！お前その寝間着遊子のじゃねぇか！」
「ん？あぁ、ちょっと借りている。」
「借りてるじゃねえよ！」

「仕方なかろう。ないのだから。」
「お兄ちゃん、私の寝間着知らない？」
「うおっ！遊子、いきなり開けるなよ！」
「それより寝間着。」
「知らねえよ。何でも俺に聞くな。」
「おかしいなー。」ガチャ
「行ったか？」
「おい、今度新しいの買え！」ゴゴゴゴゴ
「あ、あぁ。わかった…。」

一護と石田家訪問

「じゃあ、行ってくる。」
「行ってらっしゃい、お兄ちゃん。」
「行ってらっしゃい、一兄。」
遊子と夏梨が挨拶を返す。黒崎家にとって石田の家に遊びに行くことはよくあることである。
「一護、私が行くことを伝えなくても良いのか？」
ルキアは事前に石田に自分が行くことを伝えていないことを心配する。
「まあ、別に大丈夫だろ。」
なんとも曖昧な答えだった。
２人が石田の家に向かっていると、途中の横断歩道で少女が車に引かれたような形で倒れていた。そしてその少女は一護の知り合いだった。
「井上！大丈夫か！」
一護は駆けつけて声をかけると、井上は何事もなかったかのように立ち上がった。
「なんともないよ、大丈夫、大丈夫。」
えへへ、とニッコリ笑い腕を降って元気ですアピールをする井上だが一護に「車はどうした？」と聞かれると少し困り顔で
「んー、いっちゃた。」
「お前なぁ、ハァー。とりあえずお前が無事で良かったよ。」
「一護、彼女は？」
一護に小声で聞くルキア。どうやらまだ顔と名前が覚えられていないようだ。
「ああ、ルキアは転校してきたばっかでまだ覚えてないよな。一緒のクラスの井上織姫だ。んで井上、こっちが朽木ルキア。」
「よろしくですわ。」
「あ、えっと、こちらこそよろしく。」
ルキアがスカートのすそを上げて挨拶をしたものだから井上もス

カートのすそを上げて挨拶を返す。それによりルキアの視線が下に下がる。
「その足のアザは？」
そう言ったルキアの視線の先には、痛々しい捕まれた後のようなアザがあった。
「へ？何だろ、車にはねなれた時かなぁ？」
「痛むのか？」
「少しだけ。でも大丈夫。」
それだけ言い、井上は帰って行った。ルキアは相変わらず何か考えるようなしぐさをしていた。
「今考えても仕方ないぜ。とりあえず石田の家に行くぞ。」
「ああ。」
そこで一度思考を中断した。
そして今石田の家に着いた。
「大きいな。」
「そうだな。とりあえず入るぞ。」
と言ってチャイムを押すと中のメイドが「どなたですか？」と質問してきた。
「一護です。」
すると門が勝手に開いた。ルキアはそれを見て唖然としていたが、一護は平然としていて門の中へと進んで行くのでルキアもそれに続いて行く。
「やぁ、黒崎。そこの彼女は死神だろう？何故連れて来たんだい？」
「お前も俺が死神代行やってんの知ってるだろ。ならこの事もいつか話さないといけなくなる。」
「彼女は信用できるのかい？」
「少なくとも、俺の家族を救うために自分の力をなくす覚悟はあった。だから今俺が死神代行なんだ。」
石田はハァ、とため息をつき降参だとでも言うように手を上に上げ、首をふった。
「僕の負けだよ。彼女は信じよう。」

「い、一護。どういう…？」
ルキアはとても話しについていけなかった。
３人は客間へ移動し、説明を始めた。
「ルキアは滅却師って知っているか？」
「ああ、虚を尸魂界に送らず完全に消滅させる力を持っているものたちのこと、と言うぐらいには。」
「石田は滅却師なんだ。」
「な！」
ルキアが驚くのも無理はない。尸魂界では滅却師は滅んだものだと言われていた。いたとしても本当にごく少数だ。
「僕には師匠がいた。師匠の夢は死神と滅却師が手を取り合って、共に戦うことだった。けれどある日師匠が虚に襲わた時、死神は現場に遅れてやって来た。ほんとならもっと早く来ることも出来たはずなのにわざと、師匠が殺されたタイミングで死神のやつらはやって来たんだ！」
「そんな…何かの間違いでは…。」
「いいや。石田は見ちまったんだ。」
ルキアの顔が暗くなる。
「とはいえ昔よりはよくなったもんだ。」
「黒崎のおかげだよ。」
２人のやり取りで少しだけ明るくなる。ここでルキアは思い出したとばかりに一護に問う。
「それで一護。いつかは言わなくてはいけないことというのはなんだ？」
「ん？ああ、俺も滅却師の力が使えるんだよ。いや使えるって言ったらあれだな。持ってるっていう方が正しいか。」
「は？」
今日一番のびっくりかもしれないと言うくらい。言葉が出ていないルキアだった。何しろ今は死神代行なのだ。死神と滅却師の力を同時に持っている人間など聞いたことがない。
「俺のお袋が滅却師でよ。その力を俺も継いでたんだけど、今は

ちょっと封印してあるんだよ。今日はその事でここに来たんだ。」
「封印したのが僕の父らしいからね。」
「そう…なのか。」
いろいろありすぎてまだ少し頭がついていっていないようだが、とりあえずは納得したルキアだった。
「じゃあ俺は竜玄さんのところに行って来る。」
「ああ。」
客間には真顔の石田と今だ混乱して頭を整理しているルキアが残された。

一護と封印

「来たか、一護。」
　ドアを開けると眼鏡をかけて白衣を着ている銀髪のイケメンが待っていた。
「お久しぶりです。竜玄さん。」
　そう。この人こそ石田雨竜の父親であり、一護の力を封印した石田竜玄である。
「死神に、なったそうだな。」
「…家族を守るために。」
「…っふ、お前らしいな。」
　少し間があいたかと思うと、一護らしいと笑みを漏らしながら竜玄は言った。それに一護は別段気を悪くするでもなく聞き、それよりと本題に入る。
「なぁ、まだ封印しとかねぇとダメか？」
　普通の滅却師は封印など必要としない。一護の力が暴走してしまったのは一重に大きすぎる力と未熟な精神に加え、大切な存在の喪失が重なってしまったが故に起きた事故に過ぎない。だからこそ精神が成長した今では暴走する危険は、以前に比べればさほど大きくはないのだ。
「そうだな、そろそろ頃合いか。封印も少々外れて来ている。」
「えっ、外れてんのか？」
「力を強めたら漏れだすくらいにはな。」
　そう言って竜玄の懐から銀の十字架に丸い輪がついているペンダント取り出される。
　よく見るとペンダントの丸い輪の部分に少しだけヒビが入っていた。
「解《かい》。」
　その言葉と同時にペンダントと一護が光った。少しすると光は収まり、特に変化は見られなかった。
「もう解けたのか？」

言葉1つで解けてしまって少し拍子抜けな感じがした一護はそれが表情にも出てしまっていたようで
「言葉は簡単だが私の言葉でないと解けないようになっている。それと、体の中を探って見ろ。霊力が感じられるはずだ。」
言われたとうり目を閉じて集中する。すると確かに体の奥底にお袋に似た霊力が感じられた。
「感じたか？」
「ああ。」
「これからはその霊力も使いこなせるように特訓しておけ。」
「へっ?!」
いきなりの課題に変な声が出たが、よく考えれば強くなるためには当たり前のことだった。
竜玄さんに感謝と別れを告げてから歩き出す。
滅却師の霊力の使い方は石田にでも教えばいいだろうと思いながら石田とルキアのところへ向かう一護。
「待たせたな石田、ルキア。」
客室の扉を開けた一護が見た光景は仲良くしている2人でもケンカをしている2人でもなく…
「さぁどれがいい！朽木さん！」
ひらひらの服からカラフルな服までざっと数えて１０着ほどの服（スカート）をもってルキアに笑顔で迫っている石田の姿であった。
はたから見たら変態だ。ルキアも困り顔だ。
「あー。石田、何してんだ？」
「見てわからないのか？朽木さんのコーディネートだ！」
石田は一護の質問にこれだからとでも言うようにため息をついた。
これには一護も少しイラついてしまう。
石田は真面目な性格とクールな態度ゆえにあまりまわりには知られてはいないが、裁縫が得意なため少しの時間と材料があれば服を作るのは造作もないことだった。
ゆえに女性ものの服があることに対してなど一護は突っ込むはずもない。ただし…

「何でそんなにたくさんあるんだよ！」
「女性ならこのくらい当たり前だろう。」
「普段着作るんなら寝間着作ってやってくれ。」
「寝間着？」
「今無断で遊子の借りてるんだよ。」
「そうか、それならとびきりのものを…。」
　石田は早速作業に取りかかった。ルキアは自分をおいてされていた会話についていけていないようだ。
「とりあえず好きなやつ貰っとけば？ルキア。」
「いいのか？」
「お前のためにあいつが作ったんだ。貰った方がいいぞ。それにこの家には女がいないからな。こんな服あっても誰も着ないぞ。」
「そうか…、なら遠慮なく。」
　そう言ってルキアが選んだのはできるだけ飾りの少なく色もそこまで派手ではない服を3着ほどだった。ルキアが服を選び終わって数十分たった頃。
「できたよ、朽木さん！」
　今までみたことがないほど満面の笑みを石田は浮かべていた。
「材料がなくてあまり飾りはつけれなかったんだけど、オレンジを主にしてくまさんのワンポイントをつけてみたよ。どうかな？」
「おおおおぉぉ！」
　ルキアの目が輝いていたところを見るとお気に召したようだ。石田にしてはずいぶんシンプルだがさっき言ったように材料がなかったのだろう。
　つけない方がいいものが出来てると俺は思う。

　それから昼食を食べながら石田に力の使い方を教えてほしいと言

うことを伝えた。食事が終わると、トレーニングルームで一護の力の確認を行った。
つまりどれくらいの霊力が有り、ちゃんと暴走せずにいられるかという確認である。
一護は自身の中にある懐かしい霊力を感じ、少しずつ膨らませていった。かなり上がった頃大きな霊圧に同じ部屋にいたルキアは立っていられなくなった。石田も心なしかつらそうである。
そしてふっと霊圧が消えた。一護が霊力を抑えたのだ。
石田とルキアは体全体にかけられていた重りがなくなったような、重力がなくなったような錯覚を覚え、体がふらついてしまう。
「暴走の心配はないね。後は戦い方か。」
「あぁ、正直滅却師の弓矢の作り方とかわかんねぇ。」
そもそも死神と滅却師は根本的に力の使い方が違うので一護がわからないというのも無理はない。
「滅却師は死神と違って力を周りから集めているんだよ。」
「周りから?」
「あぁ。死神は自分の霊力を使って戦うが、僕たち滅却師は大気中などにある霊子を自分の霊力で集めてそれを元に戦うんだ。」
「ほぉ〜。」
「と、いう訳で最初は手のひらの霊力に霊子を集めて大きくすることから始めようか。」
「お、おう。」
という訳で始まった一護の特訓だがなかなか霊子は集まらず、途中で「こうやるんだ!」とイライラしながらお手本を見せて貰い、それから少しずつ大きくなり始めた頃に時計から無情にも帰りを知らせる音が鳴り響いた。
「もうそんな時間か。」
「あぁ、もう帰らないと遊子と夏梨が心配する。」
一護は汗を拭きながら言う。
「ルキア、そろそろ帰るぞ。」
「あぁ。すまなかったな。」

「世話になったな。」
「いつものことだ。またいつでも来い。」
手を軽く上げてお互いに別れる。

一護と井上織姫

封印をといた日の夜、一護は自室のベッドで横になりながら滅却師の力について考えていた。

「思ったよりも難しいな」

そう呟いていると一護は虚の霊圧を感じ取った。

「何だ？近い…？」

次の瞬間、目の前の壁から虚が出て一護を襲った。

「なっ！」

一護は驚きながらも死神の姿になり、攻撃を防いだ。そして追撃をするが自分の部屋をあまり壊したくないため無意識に手加減してしまっていた。

その結果、狙っていた仮面にはかすったが破壊し浄化するまでは至らなかった。

「チッ！」

もう一度攻撃しようと虚を見ると、見覚えのある顔をしていた。その姿に衝撃を感じ一護はボーッとしてしまい虚は顔を押さえながら逃げて行った。

「おい一護！追うぞ！」

「…あの虚…井上の兄貴だった…」

「何！」

２人は走りながら話していた。
そもそも虚とは、現世に漂っている霊が悪霊になったものだ。つまり死んだものなら知り合いが虚になっていても何ら不思議なことはない。
尸魂界では仮面を攻撃する際、必ず一撃で倒さなければならないとされている。それは元になった魂を見ないためである。
見てしまうと、今回の一護のように知り合いであれば動揺しまうこともあるのだ。
そしてさっきの虚は一護に返り討ちにされ、無くした心を埋めるため、唯一の肉親である井上を狙う可能性が高いので井上のもとへ急いで向かっていた。

「くそっ！」

一護は一撃で倒せなかったことを後悔した。

「悔やむのはあとだ、まずは倒すことに集中しろ」
「あぁ…」

・　・　・　・

その頃井上織姫は友人の有沢竜貴と夕飯を食べていた。

「竜貴ちゃんちの肉じゃが美味しいから大好き～」
「ほっとくとあんたワケわかんないものばっか食べてるからね～」

どうやらほっとけない織姫のために肉じゃがを持って来たようだ。
楽しく話をしながら食事をしていると、いきなり棚の上にあった熊のぬいぐるみが裂けて棚から落ちた。

「何だ？」
「ひどーい！えんらくが…」

裂けたぬいぐるみを見た織姫は今にも泣きそうな顔をしていた。
ぬいぐるみを見ていると巨大な足音のような、不気味な音が聞こえてきた。
竜貴が不気味な音に警戒し、辺りを見回していると呆然としていた織姫に異変が起こった。

「えっ？」

視線を再びぬいぐるみへ落とすと、ぬいぐるみを持っていた手のひらに真っ赤な液体がついていた。
状況を理解できずに手のひらを見ていると、腹部へと衝撃がはしった。その瞬間、織姫の体は倒れていた。

「織姫！」

竜貴が織姫へと駆け寄ろうとすると何かに吹き飛ばされた。痛みのはしった肩へと視線を向けると血が出ていた。

「何だよこれ…何で…うっ！」

再び見えない何かに殴られ、床へ仰向けに転がった時何かに覆われている感覚を竜貴は覚えた。
そして、そんな竜貴と覆っている存在を見ている者がいた。
（何がどうなって…あのお化けみたいなのは何？）
怯えている織姫だった。
さっき気絶したかのように見えた織姫だったが意識はしっかりと残っていた。何故かというと…
（あれは…私？何で…）
遠くに横たわっている織姫が見えた。正確には織姫の体である。
その体から1本の鎖がのびていた。織姫は鎖ののびている先…つまり自分の胸元を見た。
（な、何？この鎖…苦しい）
取ろうとするが全くびくともしなかった。
そうこうしている内に竜貴が虚に襲われているのを見て
（こんなことしてる場合じゃない！助けないと！）
織姫が虚の腕に体当たりをして竜貴を解放する。
解放された竜貴に織姫が声をかけるが竜貴は怯えた様子で「来るな！」と叫んでいた。
「どうしたの？竜貴ちゃん！」
「無駄だよ、織姫」
「えっ？」
「彼女には俺たちの声はおろか、姿を見ることも出来ない」

織姫は虚をキッとにらみつける。
「どうして私の名前…」
「織姫、俺の声を忘れたのかい？」
と生前の兄の声で虚は話すが
「いやっ！来ないで！」
近づいてきた虚へ織姫は拒絶を見せる。
「悲しい！悲しい！悲しい！」
と何度も繰り返し、織姫を攻撃した。
腕が織姫にあたる前に誰かが間に割って入った。黒い服にオレンジ色の頭をしている人は大きな斬魄刀で攻撃を受け止めていた。
斬魄刀を降り虚を追い返した後、周りを見て
（くそっ、竜貴も巻き込まれたのか）
「黒崎くん？やっぱり黒崎くんだよね？」
「井上？何で俺の姿が見えて…」
言いかけて胸の鎖を見た。鎖の先に織姫の体が繋がっているのを見て、ルキアに死神は同じ霊体にしか見えないと言う話を思い出した。
「まさか…霊体？」
「そうだ、つまりそいつは魂だ。死んだんだよ、織姫は」
ゆっくりと言い聞かせるように言ってくる虚に一護は苛立ちを隠

せず切りかかった。
しかし虚はあっさりとかわし、織姫の繋がっている鎖を掴んで動き回る。その最中に一撃をしっぽのような部分へいれるが意外と固く、刃が立たなかった。
刃が立たないまま、窓から外へ吹っ飛ばされ、一護は霊子を踏んで空へたった。再び虚を見ると

「動くなぁ」
「んあぁ！」

握られた織姫を見て一護の動きが止まった瞬間、しっぽのような部分で地面へと叩き落とされた。

「一護！」

心配したルキアが駆けつけてきた。

「大丈夫か？一護」
「うっ、あ、あぁ…」

頭から出血しながらもなんとか起き上がった一護にルキアは

「行けそうか？」
「あぁ、大丈夫だ」
「そうか…一護、あいつが井上の兄上だったとしても今は化け物だ。人間の心など持っておらん。ためらわずに切れ」

織姫の家では虚が織姫の兄だと伝えていた。

「ほんとにお兄ちゃん？」
「あぁ、そうだよ織姫」

「嘘！私のお兄ちゃんはこんなことする人じゃあでぁ…」
「寂しかったんだ！お前が俺のことを忘れていくのが」

織姫は兄が死んだ日から毎日欠かさず拝んでいた。
虚はその姿を救いにしていたが、友達が増えるたびに拝む回数が減り、忘れていかれるのが悲しいと言った。

「お兄ちゃん！違うの！私は…」
「いいか！織姫！お前は俺のものだ！俺を大切に思っているなら俺を二度と裏切るな！」

虚は織姫の言葉を遮り、叫んだ。

「まあまずはあの死神からだ、あいつを食らっておしまいにしてやる」
「待って！黒崎くんは関係ないの！お願いあの人をこれ以上傷つけないで！」
「黙れ！誰のせいでこうなったと思っているんだ！お前だ！」

織姫に掴みかかり、喉を締めた。

「お前は俺の言うことを聞くんだ、さもなければお前から殺してやる！」

さらに手に力が入った時。

「止めろ！」

言葉と同時に斬魄斬魄刀を突き刺し、虚が痛みに叫び、その隙に追撃を入れていくと織姫を離した。再び織姫を掴もうと伸ばした腕は、一護によって切り捨てられる。
織姫が無事なのを確認した一護は

「てめぇ、兄貴が何で先に生まれて来るのか知ってるか？後から生まれて来る妹や弟を守るためだろうが！」

妹を持つ同じ兄である一護はどうしても許せなかった。

「それを妹に向かって殺してやるなんて…死んでも言うんじゃねぇ！」

「うるさい！織姫は俺のものなんだ！両親が死んでから俺が親代わりに育てて来たんだ！織姫が3歳の時から俺が守って来たんだ！」

悲しそうな、寂しそうな顔でうつむいていると「織姫！」と強く呼ばれ虚を見ると「こっちへ来い」と手を出していた。「他の奴へは手を出さない」と言う言葉を聞くと、織姫が立ち上がり虚の方へ行くのをルキアが罠だと止める。

ルキアの説得で戸惑っている織姫の髪には雪の結晶をかたどった綺麗な髪留めが着けてあった。

その髪留めを見た瞬間、虚の頭に織姫との思い出が駆け巡った。

虚の目が変わった時、虚は叫び声をあげ、壁に頭をぶつけ出した。

理解不能な行動に3人は呆然としていると、頭の痛みを誤魔化すかのように一護へ襲いかかった。

外へ出た虚の顔へ攻撃しようと斬魄斬魄刀を振り上げるが一瞬、ためらってしまい、その隙に酸のような液体を手にかけられ、斬魄刀を落としてしまい、しっぽで地面に叩きつけられた。

「ぐっ！」

食われそうになった次の瞬間、間に織姫が入って来て、その体に攻撃を受け入れた。

「いの…うえ…？」

「おり…ひめ…」

痛む体に鞭を打って織姫は話し出した。

「ごめんね、お兄ちゃん…。私のせいだ。私があの時、1人にしないでって言ったから…」

織姫は兄の死んだ日を思い出していた。

死にそうな兄に「1人にしないで！」と織姫は叫んだ。

「だから天国に行けなかったんだよね…。私、気づいてた。お兄ちゃんが近くで見守ってくれてたこと。」

足にアザが出来ていた時、織姫は確かに車に引かれるところだった。

「危ないって足を引っ張ってくれて…」

「そうだったのか」

ルキアと一護は納得した。

「だからね、私が頼ってばかりじゃあ眠れないって思って、伝えようと思ったの。私は幸せです、心配しないでねって。でもそれが、お兄ちゃんを…寂しく…させて…」

まで言い、織姫は倒れた。それを見た虚がぶつぶつと何言か話した後、また叫び出した。

「どうなってんだ？何が起きて…」

「今、奴は己の中にいる虚に抗っているのだ。奴とて望んで虚になったわけではない。おそらく虚に取り込まれたのだろう。」

「何で、そんな」
「わからぬか？目的はお前だ」
一護の池巨大な霊力を食らうために、一護の攻撃しにくい、身近な人物を取り込み、操っていたのだ。
「織姫～！」
虚が叫んだ次の瞬間、仮面が割れて顔が見えた。
その姿に安心したのか、織姫は意識を失った。
「織姫！」
「井上！」
「うろたえるな！まだ胸の因果の鎖が切れていない。まだ私の鬼道で助けられる。」
２人が胸を撫で下ろした。
ルキアが織姫を治療していると
「俺を斬ってくれ」
「なっ！」
「理性を保っていられるのも今のうちだ。また暴れださないうちに、頼む」
一護が戸惑っているとルキアが
「一護、斬れ。虚になったものは斬ることでしか助からない」
「くっ…」
一護は眉間にしわを寄せながら（いつもだが）織姫の兄をを斬った。

「あぁ、これでやっと眠ることが出来る」
「お兄ちゃん！」

少し回復して、意識が戻った織姫は消えそうな兄を見て、思わず声をかけた。

「大丈夫だよ、織姫」
「うん、お兄ちゃんお休みなさい」

笑顔で大丈夫と言う兄の姿を見て安心する。
完全に消えるまで無言で見つめ、消えてもしばらくボーッとしていた。
するとルキアが

「おい、井上。これを見ろ」ぽんっ

織姫が見るとボタンが押され、人形のようなもの（頭のみ）が飛び出し気絶した。

「おいおい…」
「覚えておかれてはまずいだろう」

「特に貴様が」とつけ加えられ、一護は何も言えなかった。織姫を体へ戻し、家へと帰路につく。

おまけ
次の日、一護が教室へ入ると

「ほんとに横綱が部屋に来て鉄砲で壁に穴を開けたんだって！」

と言う話を聞き、もっと常識的な記憶置換はなかったのかと突っ込みたかった一護であった。